

善意と文学 —— 語りの「丁寧」をめぐって

第19回

ふたつの冠婚葬祭小説

——オコナーとトレヴァー（上）

阿部公彦

Abe Masahiko

小説はその隆盛期には作法と持ちつ持たれつの関係を持っていたが、当初から文学の語りと作法的な要請との間にはずれがあり、やがてそれはより深い溝となって両者の間の相克を浮き彫りにするようになる。前回見た『チャタレー夫人の恋人』はさまざまなレベルの「不作法」を通し、もはや小説がかつてのような単純な作法の普及装置としては機能しえなくなったことを示したとも言えるだろう。

別の言い方をすると、作品中の語り手は——そしてその裏に隠れた小説家自身も——もはや「いい人」の仮面をかぶりえなくなった。通俗的なメディアの中では、今現在も小説家は“セレブ”の一角を占める名士として扱われることが多いが、小説テキストはしばしば作法違反の先兵となるのであり、ときには意地悪さや攻撃性や悪意の表出の舞台ともなる。

ただ、おもしろいことに、ポライトネス全盛の時代には裏に隠れた悪意の支えで善意が表出されたのとちょうど裏返しの形

で、作法からの解放や不作法が主流となった20世紀以降、一見した「不適切さ」がむしろ最終的に適切さや、ひいては愛の表明につながるといった逆の事態も生じうる。

今回とりあげる二人の 아일랜드作家はいずれもそのあたりの機微にたいへん敏感である。カトリック支配の強い Irelandでは、20世紀に入った後もイギリスやアメリカなどに比べはるかに「適切さ」(propriety)による縛りが強かったが、だからこそそうした縛りとの相克を通して小説の語りは力を持ち続けてきた。作法から解放され、カジュアルさが支配するようになった社会では、わざわざ小説というジャンルで語ることの意義さえ見出すことが難しいかもしれないが、作法と不作法のせめぎ合いがリアルな葛藤を生み出す場では小説は依然として有効な表現手段なのである。

今回の二つの作品に共通するのは、作法がとりわけ前景化しやすい場面、冠婚葬祭を扱っているということである。オコナーの作品で描かれるのは葬儀。トレヴァーのものは、ややひねりをきかせた形で「離婚式＝結婚式」を扱っている。いずれの作品でも、ふだんより「決まり」や「適切さ」に敏感になった人々の様子が描出されている。

しかし、二つの作品のより重要な共通点は、いずれにおいても物語の中心となる人物が不在だということである。不在の人物をめぐって、二人の登場人物があれこれと議論を繰り広げる。実はこの二等辺三角形のような構造が、より深い意味で小説と作法とのかかわりを示している。葬儀的なものであれ婚姻的なものであれ、不在者に言い及ぶ際には、同じくその共同的な語りに参加する相手との微妙な緊張関係が生まれるとともに、「対象をいかに語るか」をめぐって「適切さ」の意識、つ

まり語りの「型」をめぐる意識が研ぎ澄まされるからである。

このような二等辺三角形の構造の中では、人は好き勝手に対象について語るわけにはいかない。言っていること、言うべきでないことについての束縛なども働く。そうした中で、二人の共同性の表れとしての語りが練り上げられていくことになる。語りはここで儀式へと近づいているのである。もちろん二人が三人になり、四人になる可能性もあるわけだが、儀式への第一歩がもっとも先鋭に示されるのは、一人による語りが二人の語りに移行する瞬間である。

これは小説そのものに「冠婚葬祭的なもの」が潜んでいることの証でもある。そもそも、不在の人物の「適切さ」についての語りはしばしば小説的な語りの土台をつくってきたが、そのような「適切さ」についての語りそのものに「適切さ」の尺度が適用されるのである。そして現実の冠婚葬祭と同じく、その「適切さ」の鍵となるのは、いかに愛を表明するかという「形」の問題なのである。小説とはそういう意味では、愛の表明を最終目的とした冠婚葬祭に限りなく近いジャンルだとさえ言える。だからこそ 20 世紀の作家は、そうした前提とどう付き合うかをつねに態度で示す必要に迫られてきた。

「花輪」の競い合う語り手

フランク・オコナーの「花輪」で描かれるのは、ある司祭の死に伴って起きた「事件」である。事件とはいってもこの上なく地味な出来事なのだが、これが周囲の人々の間にスキャンダルめいた騒ぎを引き起こす一方、亡き司祭の二人の親友の心にも小さからぬ動揺をもたらす。

よく知られているように、カトリックの司祭は今に至るまで

妻帯が許されていない。司祭には女性関係についての禁欲が求められている。ところが、ディヴァイン神父の死後、その葬儀に赤い花輪が送られてきたのである。この赤い花輪に、周囲は「女」の気配を察した。ディヴァインに何かあったのではないか？ 頭のいい皮肉屋として知られたディヴァインだが、女性関係があったという噂は聞かなかった。あるいは神父に心を寄せていた女性がいたのか。

小説の視点人物はディヴァインの親友だったフォガティで、そこにもう一人の親友だったジャクソンがからむ。当初二人の間には微妙な距離があるが、ディヴァインに送られた赤い花輪の「適切さ」について騒ぎ立てる人々と対峙する中で、次第に二人の溝は狭まっていく。以下に引用する議論にも示されるように、杓子定規に「適切さ」のルールを適用しようとする人々からディヴァインという人物を守りたいという二人の姿勢が鮮明になるのである。

「それはいいです」マーチンが言った。「これだけでも十分厄介だけど、でもそれで全部じゃないんです」

「え。それは花輪が女性からのものだから、ということですか？」ジャクソンが軽い調子で会話に割り込んできた。ふつうの人ならここで拍子抜けするところだったが、マーチンの重々しさは崩れなかった。

「そう、その通り。女性からのものだからです」

「女性！」フォガティは驚きの声をあげた。「そう書いてあるんですか」

「そうは書いてありません」

「じゃ、わからないでしょ」

「赤い薔薇なんですよ」

「赤い薔薇だったら、女性からということになるんですか」
「他にどういう可能性がありえるんです？」

「僕が思うに可能性としてあるのは、あなたの勉強したのとは別の花言葉の体系を勉強した人がいて、その人が送ってきたということじゃないですか」フォガティがまくしたてる。

ジャクソンが傍らで「よせ」と言っているのが空気でわかるような気がしたが、実際にジャクソンが口を開いたときには、その冷たさと無頓着さとの矛先は教区司祭に向けられていた。(169-70)

‘Now, that’s all very well,’ said Martin. ‘That’s bad enough by itself, but it isn’t the whole story.’

‘You mean because it’s from a woman?’ Jackson broke in lightly in a tone that would have punctured any pose less substantial than Martin’s.

‘I mean, because it’s from a woman, exactly.’

‘A woman!’ said Fogarty in astonishment. ‘Does it say so?’

‘It does not say so.’

‘Then how do you know?’

‘Because it’s red roses.’

‘And does that mean it’s from a woman?’

‘What else could it mean?’

‘I suppose it could mean it’s from somebody who didn’t study the language of flowers the way you seem to have done,’ Fogarty snapped.

He could feel Jackson’s disapproval of him weighing on the air, but when Jackson spoke it was at the parish priest

that his coldness and nonchalance were directed. (342-43)

当該地区の司祭マーティンは、あくまでルールに則ることに重きを置く。だから、「女」の気配にも敏感に反応する。一方、フォガティもジャクソンも、マーティンの性急な断罪に対して懐疑的である。ただ、話が進むにつれ、二人は「女」の存在について認めざるをえないような気持ちになっていく。そしてより冷静なジャクソンがリードする形で、少しずつ「ディヴァインにあったのかもしれないこと」について想像がめぐらされるのである。

こうして二人の元親友は、不在の人物の「適切さ」についてあれこれと議論を始めることになる。まさに“小説的”瞬間。まるで『高慢と偏見』のエリザベスとシャーロットのように、あるいはエリザベスとジェーンのように、フォガティとジャクソンはそこにいないディヴァインの品評をするのである。「死ぬ間際には、女性に頼らざるをえなかったのかもしれない」(344)、「頭のいい女性なら惹かれたかも」(345)といったような憶測も立てられる。

そのうちに、彼らは自分たちの過去を告白しはじめる。まずはフォガティ。

そしてここでもまた、最初に打ち明け話をしたのはフォガティの方だった。

「僕には無理だったんだ、ジム」真剣な口調だった。「ひょっとしたらなんて思ったこともない。たった一度をのぞいては。相手は神学校で一緒だった男の奥さんだった」(178)

Fogarty, as usual, was the first with a confession.

‘I couldn’t do it, Jim,’ he said earnestly. ‘I was never even tempted, except once, and then it was the wife of one of the men who was in the seminary with me.’ (346)

ジャクソンにもやはり「過去」があった。

「マニスターにいたとき、ある店の奥さんと親しくなった。おしゃべりをしたり、本を貸したりした。孤独で頭が変になりそうになっている人だった。それである朝、家に帰ってみるとどしゃぶりの中、玄関前でその人が待ってた。夜中からずっとそこにいたんだ。自分をどこかに連れて行って欲しいって言うんだ。「救い出して欲しい」という言い方をした。その人がどうなったかわかるだろ」(181-82)

‘When I was in Manister there was a shopkeeper’s wife I used to see. I talked to her and lent her books. She was half-crazy with loneliness. Then one morning I got home and found her standing outside my door in the pouring rain. She’d been there half the night. She wanted me to take her away, to “save” her, as she said. You can imagine what happened her after.’ (347)

しかし、フォガティもジャクソンも結局、彼女たちとは何もなかった。それに対し、ディヴァインには、少なくとも「赤い花輪」に相当する何かがあったのかもしれない。そういう意味ではディヴァインは、二人が実現できなかった何かを代わりに成し遂げたとも言える。ディヴァインに送られた赤い花輪を守ろうとする二人は、自分たちの過去そのものを守ろうとしている。自分たちの「そうであったかもしれない何か」が無意味に

ならないように、むしろディヴァインに何かあってほしかったと願ってさえいる。

埋葬の場面でも、赤い花輪は人々の抵抗に遭う。集まったディヴァインの親戚たちは「あれはいったい誰が送ったものだ？」と、批判的な目を向ける。とくに未婚の妹の指弾は厳しかった。「もしあの花輪をお墓まで持っていったら、町中の笑いものよ」と彼女は言う。ここへきて、フォガティはついに及び腰になる。地元出身の彼は、子供の頃から見慣れた風景の中で、あらためて共同体の暖かさと、その拘束とをひしひしと感じたのである。

しかし、そこで「よそ者」だというジャクソンが割ってはい

「当然ながら、私はフォガティ神父とこのことについて話し合いました。個人的には私は花輪なんか送るのは非常識だと思います」。そこで、その聖職者らしい柔和な声に急に脅すような調子をこめて、あざけるようにジャクソンは肩をすくめて見せた。「ただ、あくまでよそ者として言わせてもらうと、もしその花輪を墓地から送り返したりしたら、あなたたちは笑いものどころか、もっとひどい目に遭いますよ。亡くなった人の名前に泥を塗るようなもので、生きている限りこのことは誰も忘れないでしょうね。……もちろんあくまでよそ者の見方なんですけど」ジャクソンは礼儀正しく付け加え、その一方で、苛立たしそうにことさら音をたてて息を吸ったりもした。(187)

‘Naturally, Father Fogarty and I have discussed it already. I think personally that it was entirely improper to send a wreath.’ Then his mild, clerical voice suddenly grew

menacing and he shrugged his shoulders with an air of contempt. 'But, speaking as an outsider, I'd say if you were to send that wreath back from the graveyard, you'd make yourself something far worse than a laughing stock. You'd throw mud on a dead man's name that would never be forgotten for you the longest day you lived Of course, that's only an outsider's opinion,' he added urbanely, drawing in his breath in a positive hiss. (349-50)

先の場面と同じようにここでも、ドライで無頓着に見えるジャクソンが、誰にも増して濃厚な愛の表明を行うことになる。視点人物のフォガティは、驚きとともにその果敢さに打たれるわけである。ただ、ひょっとするとジャクソンのこのような言動は、フォガティの存在あってこそそのものなのかもしれない。つまり、やや微温的な感傷性とともに先に口を開くフォガティを横目で見ているからこそ、ジャクソンはより突っ張ったスタンスをとることになるのではないか。ジャクソンの言動はフォガティを多分に意識したもので、ある意味では、フォガティの態度に対する一種の修正的な対応とも読めるのである。

ともかく、こうして二人は花輪を守る。そしてフォガティは最後の一節で感慨にふけるのである。「自分とジャクソンが守ったのが単なる感傷的なしるし以上のものだという考えが、熱い思いとともにこみあげてきた。自分たち二人をディヴァインへとつないだもの、そしてこれからは、二人の間をつなぐもの。それは愛なのだ」(. . . what he and Jackson had protected was something more than a sentimental token. It was the thing that had linked them to Devine, and for the future would link them to one another — love. [350]) もちろん

んこれは二人の「告白」を通して明らかになったように、三人が共有していた「愛」のことである。作法や適切さにとらわれない、人間らしい感情にこそ真実を見出そうとするのは、小説の典型的なハッピーエンドのパターンとも見える。だが、果たしてそれだけだろうか。

もはやそこにはいないディヴァインを語るフォガティとジャクソンの姿には、競ってディヴァインに対する愛を表明しようとする姿勢も見える。しかし、二人はそれぞれ独自のディヴァイン語りを展開するようであり、相手のディヴァイン語りに拘束されてもいる。その結果、最終的には二人のディヴァイン語りは相補的なものとして、一種の共同作業として完成していく。そこにはディヴァインを頂点とした二等辺三角形の関係が形成されていたと言えるだろう。その根幹にあるのがホモエロティックなものかどうか。少なくともそこに「愛」がからんでいたのは間違いない。彼らが妻帯を禁じられた神父たちであれば、そして彼らの女性関係があくまで成就しえなかったものとして語られているとするなら、この「愛」が男性と女性との間に生ずる性的なものと類似している可能性もなくはない。赤い花輪は最終的には、フォガティとジャクソンの、ディヴァインに対する気持ちを代弁するとも読めるかもしれない。

しかし、忘れてはならないのは、このエロスがあくまで語りを通して発生しているということである。ディヴァインについて語りたいというフォガティとジャクソンの欲望そのもの、つまり語るという行為と不即不離のものとしてこのエロスは描かれている。二人は元々は独自の視点から、しかしやがては共同的に、同一の対象であるディヴァインを語ることで、語りに伴わざるをえない「愛の形」に目覚めていく。「花輪」という小

説の作品としての成就是、この二人の人物がどこまで共同的に愛の表明を行えたかという点にかかっている。花輪はその共同性の象徴だとも言える。それが小説の結末に至ってはっきりしたわけである。そもそも花輪の送り主が最後まで不明で、ディヴァインの人生についても知られていないことが多いのも、フォガティとジャクソンが自分たちの言葉でディヴァインを再創造するための布石だと考えられるのである。

〈文 献〉

*オコナーとトレヴァーからの引用についてはそれぞれ **Frank O'Connor, *My Oedipus Complex and Other Stories*. Ed. by Julian Barnes (London: Penguin, 2005); William Trevor, *William Trevor: The Collected Stories* (London: Penguin, 1993)** に基づき、以下の版による日本語訳を付した。フランク・オコナー、阿部公彦訳『フランク・オコナー短篇集』(岩波書店 2008)、ウィリアム・トレヴァー、榎木伸明訳『アイランド・ストーリーズ』(国書刊行会 2010)。その他の文献は以下のとおり。

阿部公彦『文学を〈凝視する〉』(岩波書店 2012)

北山修編『共視論——母子像の心理学』(講談社選書メチエ 2005)

ルネ・ジラルル、古田幸男訳『欲望の現象学』(法政大学出版局 2010)

(東京大学准教授)